

伝統行事を教材とした保育内容「環境」指導法の一考察

遠山 佳治・平井 孔仁子*

A Study on the Teaching Environment : The Traditional Events

Yoshiharu TOHYAMA and Kuniko HIRAI

1. はじめに

平成30年4月1日より施行される、改正の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、身近な環境との関わりに関する領域の「環境」の重要度は高く、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらの生活に取り入れていこうとする力を養う」という目的がある。

幼児は、周囲の自然や人工物に触れて、興味・関心をもち、関わりながら生きる力の基となる心情、意欲、態度を自ら培っていく。とくに幼稚園の環境は、幼稚園教育要領に示されているねらいが達成できるように、園舎、樹木や飼育栽培物、運動遊具等の充実、配置等にこまやかな配慮のもとに、計画設置されている。また、季節の変化に関連して行なわれる伝統行事も幼児の生活に変化をもたらし、その由来や意義を知ることによって心情を豊かにするため、指導計画に盛り込まれている。そこで、本稿では季節感あふれる伝統行事に関わる中で、幼児がどのような関心をもち、日常生活に取り入れて成長していくかを、5歳児の活動する姿を取り上げ、その育ちをみつめることとした。

2. こどもの日（端午の節句）を楽しむ

こどもの日である端午（月のはじめの午の日という意味）の節句は、もともと古代中国において、夏草の香で夏の邪気・病を防ぐためのお祓いの行事であった。それが日本に伝来して、平安時代の貴族社会でもてはやされ、菖蒲から尚武・勝負と連想され、武家の男子の節句として定着していく。江戸時代には鯉のぼりや武者人形や兜の飾りが一般化していく。鯉のぼりの原型は、武士の吹き流しであるが、「鯉の滝登り」「登竜門」など鯉の元気が鯉のぼりへと変化していく。

食べ物としては、粽と柏餅がある。粽は、古代中国の屈原の伝説まで遡る程の長き伝統があり、繁殖力の強い茅の葉を巻いたことから茅巻と呼んだ。粽は元々米料理であったが、餅菓子としても使用されるようになり、端午の節句に定着した。京都の祇園祭りで粽を飾るが、食べ

* 元専任教員（教授）

物ではなく厄病・災難除けのお守りである。それに対して、柏餅は日本生まれの端午の節句用の菓子である。江戸時代後半の宝暦年間（1751～63）に江戸の下谷亀屋が考案したもので、芽吹くまで落葉しない縁起のよい柏を使って、あん入り餅をくるんだ餅菓子である。そのため、今でも東日本では柏餅が、西日本では粽の方が多く食べられている。なお、愛知県西三河地域においては、餅に高キビを混ぜて赤茶色にした「けんせいの柏餅」という地域独自の食文化もみえる。

〈指導法の事例1〉

3歳児・4歳児とこどもの日に関する活動を経験している5歳児は、より自分の成長に関心を持ち、こどもの日の伝統行事に積極的にに関わり、親しんで活動する。

（1）園内の環境

- ・運動場に、鯉のぼり用の掲揚ポールを確認する。
- ・玄関ホールに、五月人形を飾る。
- ・保育室に、端午の節句の絵本、折り紙の本を置く。

（2）ねらい

こどもの日（端午の節句）の由来や意義を知り、行事に積極的に関わって楽しむ。

（3）活動の展開（4月24日～28日）

月日	教師の援助・配慮（環境設定）	幼児の姿
4月24日 （1日目）	<p>○こどもの日の思い出を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもの日は、どんな日か、4歳児のとき行ったことで楽しかったことはどんなことがあったかを、思い出して話すように促す。 ・教師は幼児たちが話すことを静かに聞き、どのように受け止めているか把握する。 <p>○協同で製作する気持ちをもたせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きなこいのぼりを作ろうと投げ掛ける。 ・「年長組なので、みんなであの運動場に上っているようなこいのぼりを作ろうと思うのだけど、どうかしら」 ・「吹き流し、真鯉、緋鯉、子ども鯉2つをグループで1つずつ作るのは」 	<p>○教師の話聞く。</p> <p>○机のグループごとに自由に話す。</p> <p>※1</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・「こいのぼりをあげる」「鯉みたいに元気になるようにする日」・「侍のように強くなる」等 ・「こいのぼりを作って家に持って帰った」 ・「おもしろいことはなかった」 ・「旅行に行った。今年ディズニーランドへいくの」「わたし、イチゴ狩りに行った」 </div> <p>・「グループで1つ作るのなら、できるね」</p> <p>○どの鯉を作るかをグループで話し合う。作りたいものが重って、じゃんけんで決めている。</p>

	<p>○古いこいのほりを保育室に置く。</p> <p>○材料・用具の準備について考えるよう話す。</p>	<p>※2</p> <p>・吹き流しになったグループ内では、「あんなのいや」と言う女児がいて、なかなか一緒にひとつのものを作ろうとする気持ちがまとまらない。</p> <p>・5～6分過ぎたとき、一人の男児が「吹き流しは、簡単だから、一番早くできるぞ」と言い、やっとまとまっていた。</p>
<p>4月25日 (2日目) ～ 4月28日</p>	<p>・保育室は机・椅子を片付けて、製作の場を広くしておく。</p> <p>・製作の手順を書いたパネルを貼って置く。</p> <p>・材料・用具は中央の机上に置く。 白布（古いシーツ） カラーペン（太ペン—黒・赤・青・桃・橙、各12本） （細ペン—黒）</p> <p>・針金、接着剤、布切り用はさみ</p>	<p>○登園後、順次製作に取りかかる。</p> <p>※3</p> <p>・8時40分頃、登園してきたA子。持ち物の始末、遊びの身支度をすると「先生、緋鯉これ？」と材料を指差して言い、取りかかろうとする。</p> <p>・他のグループのB子が登園して来ると、「B子ちゃんおはよう、ここ持って」と声を掛ける。B子「うん、わかった」と言い、身支度を終わると白布の端を持つ。</p>
	<p>○兜の折り方の順序を書いた図を貼る。</p> <p>○新聞紙 70枚</p>	<p>・B子、同じグループC男が登園して来ると「A子ちゃん、C男くんが来たから」と言って立っていく。</p> <p>・A子「B子ちゃんありがとう」と言う。</p> <p>・順次登園するとグループごとに製作にとりかかる。</p> <p>・グループでの製作が終った男児は古い真鯉の中に入って遊び出す。また、男児は新聞紙で兜や棒を作り、チャンバラのようなことをして遊び出す。</p>

<p>5月2日</p> <p>10:30</p>	<p>○保育室に植物図鑑を開いておく。</p> <p>○園だよりで保護者へ、柏餅、粽を食べることを知らせ、アレルギー、好き嫌い等を事前に把握しておく。</p> <p>○五月人形に柏餅、粽を供えておく。</p> <p>○柏餅、粽の由来・意義について話す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柏の木は、新芽が出ないうちは古い葉は落ちないことを大人が子どもの成長を見守っていることとして話す。 ・粽を巻いてあるひもは、昔は、荒れた土地に生えているイネ科の茅（ちがや）で巻いたことからの云われで、どのような苦しい条件の所でも強く生きていくようにという意味があること話す。 <p>○柏餅、粽の由来や意義を家族に話すように促す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで作ったこいのぼりをボールに上げ、「やったー」と喜ぶ。 <p>○柏餅、粽の由来・意義についての話を聞く。</p> <p>※4</p> <div data-bbox="760 442 1186 1161" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・五月人形の前にお供えしてあるものに気付いた幼児が「かしわもち、ちまきがあるよ」と友達に伝えている。 <p>○お供えの柏餅や粽を食べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで食べて、「おいしいね」と言う。 ・「家でもう食べたよ」と言う幼児もいる。 ・教師が家族に由来や意味を伝えるように言う「ふーん」と言って納得していない表情の幼児が多い。 ・「もう一度言って」「この葉、持って帰って話すわ」とかばんの中に入れる幼児もいる。 ・「わたし、言える。お父さんやお母さんがわたしの大きくなるのを待っているのが、かしわもちでしょ」と言う。 </div>
--------------------------	---	--

(4) 幼児の姿から捉えたこどもの日（端午の節句）

※1の姿から、3歳児、4歳児の経験では、鯉のように元気になることが「こどもの日」という意味で受け止めているが、自分の楽しい経験としては感じていないように思われる。伝統行事が主体的な活動になるようにするには、発達に合わせ、伝え方や活動内容などの指導に工夫が必要である。

※2・※3の姿から、5歳児になると、友達を意識して協同で製作ができ、主体的活動として展開をしている。

※4の姿から、伝統行事は非日常的であるものが多いが、発達に応じた由来や意義の説明をし、理解することで目的がはっきりし、生活の節（区切）となり、成長を促している。年齢を重ね、体験することで由来や意義に興味・関心が深まる。その都度、話し伝えることで身近なものとして、伝統行事を理解していくことがわかった。

3. 星に興味をもって、たなばた（七夕）まつりを楽しむ

7月7日の七夕は五節句の一つで、乞巧^{きっこうでん}奠という技工・芸能の上達を願う祭りと、織女星（コト座ヴェガ、織姫）と牽牛星（ワシ座アルタイル、彦星）の星合わせの棚機伝説が混じりあった星祭りである。乞巧奠、星合わせの伝説ともに古代中国に遡ることができるが、そこに日本古来の機織りの棚機津女の信仰が加わる。棚機津女は、人里離れた機屋に籠り、祖霊の神を迎える。その神は、棚に設けられた機に降臨するため、タナバタと呼ぶようになった。葉竹に願い事を記した五色の短冊を飾ることは、乞巧奠に由来する。日本の平安時代では、芋の葉に溜まった露を集めて墨を摺り、梶の葉に歌をしたためて星に手向けている。現代の七夕祭りは東北の仙台や神奈川県平塚が有名であるが、東海地方では愛知県の尾張一宮と三河の安城が大型の七夕祭りを行っている。

七夕の食文化は、お供えの夏野菜と天の川を表している素麺である。素麺の原型は、唐菓子の索餅であった。索餅とは、米粉や小麦粉などの材料を油で揚げて甘味を付けたものである。愛知県津島神社の門前菓子である、あかだ・くつわなどの油菓子がこの索餅に近いものと思われる。室町時代には点心として現在の素麺が普及し、江戸時代には七夕で素麺が供えられることが定着した。一般に、奈良県の三輪素麺、兵庫県の揖保の糸、香川県小豆島の素麺が有名であるが、東海地方では三重県四日市市の大矢知の手延べ素麺、愛知県安城市の和泉素麺が産地である。

〈指導法の事例2〉

（1）活動の展開（7月7日以前）

4月中旬：夏野菜を植える。それ以降は世話をする。

- ・キュウリ、ナス、トマト、サトイモ、サツマイモをプランターに植える。（市街地で耕作地がない為）

7月上旬：プラネタリウムを見学する。

- ・織女星、牽牛星の物語を楽しく見る。
- ・夏の星の位置に興味をもって見る。

7月上旬：たなばた飾りを作る。

- ・短冊、網飾り、吹き流し、薬玉、舟等作って笹に結ぶ。

7月上旬：たなばたにお供をする。

- ・夏野菜や果物、そうめん等を供えて、その収穫に感謝の気持ちをもつ。

（2）活動の展開（7月7日）・たなばたまつりをする。

教師の援助・配慮（環境設定）	幼児の姿
○プラネタリウムを見て、感じたこと思ったことを話すように促す。	○プラネタリウムを見て、感じたこと、思ったことを話す。 <div> ・「宇宙に飛び出しておもしろかった」 </div> <div> ・「本当のロケットに乗ってみたい」 </div> <div> ・「星がいっぱいできれいだったね」 </div>

<p>○たなばた飾りの由来について話す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短冊に書いたことについて聞く。 ・網飾、吹き流し、薬玉、舟、笹竹各々について話す。 <p>○お供について話す。</p> <p>栽培物のようすを話すように促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤くなったミニトマトは供える。 （スイカ、キュウリ、トマト、そうめん、トウモロコシは購入したもの） <p>○お供のスイカを食べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育室の飼育箱にカブトムシ。 <p>○影絵「ひこぼしとおひめ」を映写する。 （年長児合同）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・影絵は教師たちが力を合わせ製作したことを話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「織姫さんと彦星さんのお話、かわいそうだったね」 ・「地球に帰るとき、ロケットが出発するとき、すごい音だった。空があかるくなったら、名古屋に着いた、速かったね」などさまざまな話が出る。 <p>○飾り各々の由来や意味を聞く。</p> <p>○短冊に書いたことを話す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おおきくなったときのことから、お願いがかなうかわからない」 ・「きく組（4歳児）のとき書いたこと、なっていない」 ・「ないしょだから言えない」 ・「ていねいに作ったから、お願いがかなうよね」と言う。 <p>○お供えにする栽培物について話す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ミニトマトは赤くなってきた」 ・「ナスは、紫の花が咲いたけれど、」 ・「キュウリもできていないよ」など供えにできること、できないことについて言う。「幼稚園ではスイカできない？」と突然言う。教師が「作りたい？」と聞く。「作ってたくさん食べたい。」 ・「スイカ、大好き」「おいしいね」 ・「ぼくも好き、もっと食べたい」「天気がいいとおいしくなるんだってお母さん言ってたよ」 ・「皮、カブトムシにやるんでしょ」 <p>○影絵を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「天の川きれいだったよ」 ・「せんせい、上手に作ったね」
---	--

（3）幼児の姿から捉えたたなばたまつり

プラネタリウム見学後、星の図鑑を見て、「天の川、織女星、牽牛星だ」などと言い合い、星に対して関心を深めたことがわかり、よい経験であることがわかる。

たなばた飾りの由来についても網飾りが豊漁を祈るもの、薬玉が病氣などの難を逃れるもの、吹き流しの五色が自然界の「木・火・土・金・水」（五行説）を表しているもの、舟が海の安全を願うもの等の話を集中して聞く。

製作活動では見本や順序の図を見て、図形の名前を言ったり、平面に切込みを入れることで立体物になることに気付く。このことは、技術や知識を学び取っていることがわかる。それぞれの幼児が自分から取り組み、分からないところは友だち同士で聞き合っているなど、主体的な活動になっている。

夏の野菜、果物をお供えし、そのおさがりとして、スイカを食べ「おいしい」「おいしい」と言っている。また、自分たちでスイカを育てたいという。幼児が夏野菜を育てている経験は、収穫に対して期待を大きくし、たなばたが収穫の感謝祭でもあることを知り、親しみをもって、活動していると思われる。

夏野菜の栽培、プラネタリウム見学、たなばた飾り作り、お供えを食べる活動が関連していたので、伝統行事というより、身近な活動として感じて、活動を展開している。

影絵をみて、教師に「天の川きれいだったね」とか「先生じょうずに作ったね」などと言い、感謝の気持ちを言葉で表す力も育っていることがわかる。

4. 月に関心をもって、お月見を楽しむ

旧暦8月15日夜の宴が、お月見（仲秋の名月）である。月に不死の仙薬があるという思想とともに月の風習は、古代中国から伝わり、日本では平安時代に始まり、室町時代に定着した。また、月見には豊年祭として意味もあり、日本では里芋の収穫祭を表し、芋名月とも呼ばれている。

その月見には、秋の七草であるススキや萩を供えるとともに、月見の菓子をお供えする。中国では月餅であるが、日本の江戸時代からは月見団子が一般的である。江戸（東京）を中心として、上新粉を丸めて蒸しただけの丸型の素団子を、ピラミッド状に積み上げる。それに対して関西では、収穫された里芋が表現されていて、里芋型の団子の回りに餡をまぶしている。名古屋を中心とした地域では、米粉で作った里芋型3色（白・桃・黒色）ういろが飾られる。

〈指導法の事例3〉

（1）保育室の環境

- ・秋の七草の中から、すすき、はぎ、ききょう、なでしこを花びんに活ける。
- ・壁面に月の変化図鑑表を貼る。
- ・幼児が育て、掘り出したサツマイモを器に入れ、机に置く。

（2）活動の展開（10月4日）・・・幼児の姿を含む。

8：45 サツマイモに触れてから、持ち物の身支度をする幼児。「先生、これいつ食べるの？」、「すすき、お母さんも飾ったよ」等言う。その後、身支度が終わると、自分の好きな遊びをするため、運動場や遊戯室へ出ていく。

10：30 サツマイモが蒸しあがったことを知り、遊びの片付けをして、保育室に戻って来る。

10：40 月の変化や月見の行事についての話を聞く。

月の変化の図鑑表を見ながら、自分が見たことのある月の形を話す。

- ・ A男「ここ、月がないの」と新月の所を指差して言う。
- ・ B男 矢印を見て、「こっちになるの」
- ・ A子「みかづき」
- ・ C男 ひらがなを拾い読みして、「ふつかつきって言うんだ」
- ・ A子「なら、つぎね」と指差して言う。
- ・ C男 順次、ひらがなを読んで行き、「じゅうごや、まんげつ」と言う。
- ・ 教師：「まんまるお月さんは、満月ね」「あした、あさっての夜がその満月なの」「とても、きれいな満月なので、おだんごやおかしやくだものを飾って、お家の方と一緒にお月さまを見ましょう」「今日は、みんなが育てたサツマイモを食べて、お月見の練習しましょう」

11：00 サツマイモをみんなで食べて楽しむ。

- 1口サイズのサツマイモもあつという間に食べ、「これだけ」と不満顔をしている。
- ・「ぼくらが作ったイモだからおいしいね」と言う幼児もいる。

（3）幼児の姿から見たお月見の行事

5歳児になるとひらがなの拾い読みができたり、図鑑表を見て順序性があることにも気付く幼児もあり、その幼児たちは知っていることや気付いたことを互いに言葉で伝え合っている。

満月の日の、降園時に「今晚、お月様見るよ」と言って帰る。

5日の朝、「夕べ、お月様見たよ」と報告する幼児は20人程いたが、「寝た」「忘れた」と言っている子が10人ほどあった。

この様子から、お月見の行事は家庭環境によって左右することがわかった。そこで次の家庭への連絡だよりに、幼児の月見に関しての言動を書き、成長する姿を伝えた。後日、保護者から「次の満月には月見をします。」などの言葉があり、連絡だよりで幼児の姿を知らせる事で、保護者も月見に興味を持ち、幼児の興味・関心を高めることに繋がることわかった。

5. おしるこを食べて、鏡開きを楽しむ

正月に歳神様にお供えしていた鏡餅をさげて、家族一同が食べる行事（神人供食）が鏡開きである。江戸時代の当初は1月20日であったが、後に1月11日に改められた。武家では、男子は甲冑に備えた餅を、女子は鏡台に備えた餅を雑煮にして食べた。鏡餅は刃物を使って切らずに、手や槌で割り開いた。次第に、雑煮からおしるこ（ぜんざい）にして食べるようになった。

ここで、「おしるこ（汁粉）」と「ぜんざい（善哉）」の違いについて触れておく。関東（東京）では、汁気があるものを「おしるこ」と呼び、汁気のないものを「ぜんざい」と呼ぶ。関西では、汁気がないものは「亀山」と呼び、汁気のあるもので、こしあんを「おしるこ」、粒あんを「ぜんざい」と呼んでいる。東海地方も関西と同様な呼び方である。三重県津市に本社をもつ井村屋も同様な呼び方をしている。なお、「ぜんざい」の発祥は、出雲の10月に全国の神々が集まることより、神在餅に由来する。

〈指導法の事例4〉

(1) 活動の展開 (正月以前)

○12月21日 餅つきをする。教師が手を添えて餅つきをする。

準備 臼1、子ども用杵5、餅取り用桶1、杓3、手桶1、白布3、くど1、かま1

・子ども用杵のため、一人ずつつける。つきたい幼児もいる。

消火用器1、幼児椅子30、皿1組35、きな粉、あんこ

○12月22日 作った鏡餅を飾る。・・設定場所 ピロティ

(2) 活動の展開 (1月11日)・・鏡開きをする。

○鏡餅、鏡開きの由来と意義の話を聞く。(前日)

年神さまにお供えした鏡餅を食べると、新しい年をしあわせに過ごせる力がつく。あずきを食することで健康を願い、叶うという由来がある。そこで、おしるこに鏡餅を入れて食べれば、きっとしあわせになれるという意味で鏡開きにおしるこを食べる風習があることを知る。

○準備 木槌10 白布3

○鏡餅を割る。

・白布を敷いた上で組積み木の木槌で鏡餅を割る。

・小さく割れた餅を調理室へ持って行く。

○おしるこを食べる

幼児の姿

「元気になるぞ」と言って、食べ始める。A子「先生、固い餅がある。残すとしあわせにならない？」と言う。教師が「替えてあげるから、大丈夫だよ」とやわらかい餅と替える。A子「あ、よかった」とほっとして、笑顔になった。元気のよい男児たちが「おかわりない?」「きんにくもりもりになるぞ」「もっと元気になりたい」など口々に言う。

(3) 幼児の姿から捉える鏡開き

餅つきをする。→鏡餅を作る。→鏡餅を飾る。→鏡餅を割る。→由来や意義の話を聞く。→おしるこを食べて鏡開きを楽しむ。という活動を連って経験していることが、鏡開きの行事を身近なできごととして受け止めている。

おしるこを食べているときの表情や言葉から、由来や意義が自分のことのように感じ取って行事を楽しんでいることがわかる。お正月に関連する行事は多くあり、家庭でもそれらを体験しながら生活しているため、幼児たちも行事であると同時に日常生活のように感じ、幼稚園での行事も主体的な遊びと同じように積極的に関って進めている。

A子のように食べないとしあわせにならないと感じる幼児もいるため、ひとり一人の幼児に配慮し、個別指導をすることが必要と言える。

6. 伝統行事と幼児の育ちを考える (おわりに)

幼児は、家庭生活から幼稚園生活に入り、人的環境、事物環境が広くなり、様々な関わりを持つようになる。その中で自らが言動し、関わったものへの興味が高まり、表現を豊かにする

とともに、生活の仕方や自分への理解も深めていく。

幼稚園では、幼児の主体的な活動としての総合的な遊びを通して、能動的に物事に関わり、自己の育ちを高めたり、深めたりしていく。そして、自ら学ぶ意欲や自ら学ぶ力を養っていく幼児の生活、保育が重んじられている。そこで、指導計画を作成するときは、3歳児、4歳児、5歳児（1～3年）という教育期間の成長の見通し、それぞれ伝統行事が幼児の成長にどのようにかわるとよいかを考え、行事の意義・目的を明確にして編成している。

指導計画に編成されたこどもの日（端午の節句）、たなばたまつり、お月見、鏡開きの実践を振り返って、伝統行事が幼児の主体的な活動になっているか、幼児の心情（情操）を養い、保育に変化や豊かさを与えているか、幼児の生活の節になっているのかを捉えてみた。

〈指導法の事例1〉

こどもの日（端午の節句）では、幼児の話す様子から、連休での家庭の楽しい行事と幼稚園で行う伝統行事を交じり合っただけで受け止めていることがわかった。5歳児の活動として、製作のグループ活動やこいのぼりくぐりから発展して、ゲームとして楽しい遊びにしていることは、能動的な活動となり、興味が高まっている。

日頃の幼児の言動をよく見つけ、その中から、幼児がどのようなことに喜びを感じているかを捉え、現在の興味、関心を伝統行事の活動に組み入れることが必要であることがわかった。伝統行事があるから取り入れるというのではなく、日々の主体的活動と同じように受け止め、活動するようになる指導の工夫が大切である。

お供えとして食べ物の由来とその意味を幼児が家族に伝えることを手がかりとし、柏や粽の葉を持って帰る。降園時に保護者へ幼児に伝えたことについて話し、幼児の話をゆっくりとしっかり聞くことを依頼した。後日、登園時に保護者からそれぞれの幼児の様子を聞き、半数の幼児が柏の葉の由来を正しく話したことがわかった。粽の茅については、うまく伝えることができなかったことがわかり、6月の学年だよりに柏餅、粽を食べたときの幼児の様子と共に由来や意義を書いた。その後の懇談会では、保護者から、由来や意義を知ったと喜ばれ、家庭との繋がりもできた。

〈指導法の事例2〉

たなばたまつりでは、4月から夏野菜の苗を植える活動から始まった。朝、登園すると、幼児がすすんで野菜の水やりが行われる様子が見受けられ、自然と幼児の日課となった。それと同時に、「先生、野菜のつぼみが大きくなったよ」とか「花が咲いたよ」などの成長の様子をいきいきとした表情で報告してくれた幼児が多かった。命あるものを育てる喜びを肌で感じることであった活動であった。

また、それまであまり目を向けなかった星への興味を引き出すという、発展的な活動として、プラネタリウム見学を取り入れた。幼児が「昨日ね、すごくきらきらしてる星をみつけたよ」、「お母さんと、オリオン座はどれかなって、一緒に探したよ」など星への興味から幼児それぞれの探求心が広がった様子がうかがえた。

このように、短冊に願い事を書く伝統行事からさらに身の回りの環境を身近な生活に関連させながら楽しく幼児の興味関心を引き出すことができた。

〈指導法の事例3〉

伝統行事であるお月見から、身の回りの環境へ気づきを持たせるきっかけとして月を取り上げた。お供え物として、秋の収穫物に多くされているサトイモ、エダマメがあり、またクリ、カキ、ナシのように丸い形のものを飾ったり、団子を三方にのせて、お供えすることを伝える

だけでなく、月の変化の話なども幼児に投げかけた。月の変化図鑑表や月の図鑑も幼児に提示し幼児の探求心に動機づけられるように工夫をした。

そうすることにより、「昨日はきれいな三日月だったよ」、「昨日の月は大きかった」「あともう少しまんまるなお月さんになるよ」など身の回りに興味を持ち、自ら深めていく様子を見ることが出来た。連絡便りで保護者へ周知することによって、保護者も一緒に幼児の興味に寄り添うことが、より一層できた。そうすることにより、さらに継続的に月の観察に興味を持って深めることができた家庭もあった。「先生、朝も月を見ることができるよ」と嬉々とした表情で報告してくれた幼児の話にみんなが驚いたりする場面もあった。

このように、保育者の指導の工夫だけでなく、幼児の能動的な活動によって他の幼児への興味関心を引き出され、お互いが関係しながら育ちあいしていく大切さも感じられた。

〈指導法の事例4〉

鏡餅をお供えするお正月の準備から鏡開きでおしるこを食べる活動では、もち米を園で蒸し、子供用の臼と杵を用意し、園児たちに餅をつかせた。子供用の臼と杵を用意することによって、幼児はあまり大人の援助を受けずに自ら餅をつけ、より楽しく安全に活動ができた。また、「餅を自分でついた」という貴重な体験をさせるとともに達成感を味わせることもできた。それは、おおいに意欲や興味を引き出す重要な指導上の工夫につながったと思う。また「おもちがすごくやわらかい」、「触れないくらい熱いね」など固いお供え餅が当たり前だった幼児には、新鮮な感動を感じさせることができた。実際に鏡餅を丸く形を整え、作ったり、園内に飾ることにより、お正月を迎える伝統行事への関心を高めさせることもできた。「家で鏡餅を飾るお手伝いをしてくれました」など保護者からの報告や「鏡開きをお家でもやったよ」とか伝統行事への関わりを意欲的に言ってくる子もいた。最近はお正月用の餅を家でつく慣習は残念ながら消えつつある。だからこそ、このような園での貴重な体験が多くあることで、楽しい活動だけでなく、本当の意味での生きる力を育むことができると思われる。

これらの4つの事例から捉えた幼児と伝統行事は、下記の5点が大切であると考えられる。

- ①行事の由来や意義を明確にする。
- ②発達に応じたねらいを設定する。
- ③幼児の興味・関心を引き出す指導の工夫をする。
- ④教師（保育者）と幼児が共に考え出す活動にする。
- ⑤保護者との連携を深めて行う。

以上のように、伝統行事の多くは、自然と結びついて心情（情緒）を養い、日常生活に潤いを与えている。それらのことから、幼児にとって、伝統行事を体験することには、人や自然を敬う心を育て、社会生活や家庭生活に楽しさを感じる心を養える有意義な経験であると言える。

特に最近では家庭での伝統行事への取り組みも薄れつつある。未来に生きる子どもたちのためにも伝統行事を踏襲することを家庭だけにまかせるのではなく園教育にも幼児の興味関心を引き出させながらうまく経験させるのがこれからのとても重要である。

実践を振り返ることで、工夫された援助（配慮、留意、環境設定）が大切であることに改めて気付くことができた。保育者は、伝統行事に関わって生き生きと楽しく活動する幼児の姿を描きながら、これらの実践に取り組む意欲的に取り組む姿勢が必要である。

参考文献

- ・全国保育士会編（2017）『保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領』全国社会福祉協議会
- ・文部科学省編（2008）『幼稚園指導要領解説』フレーベル館
- ・高野紀子（2006）『和の行事のえほん 1巻 春と夏の巻』あすなろ書房
- ・高野紀子（2007）『和の行事のえほん 2巻 秋と冬の巻』あすなろ書房
- ・伊東宏・岡崎比左子・小川清美・相馬和子・民秋言（1983）『子どもと年中行事』相川書房
- ・萌文書林編集部編（2015）『子どもに伝えたい年中行事・記念日（縮小版）』萌文書林
- ・遠山佳治（2011）「月を愛でる」『月刊なごや』平成23年9月号、北白川書房
- ・遠山佳治（2012）「子どもに伝えていきたい行事 ひな祭り」『たのしく食べようニュース』第330号、少年写真新聞社
- ・遠山佳治（2014）「子どもたちとともに楽しみたい年中行事」『子とともにゆう&ゆう』第60巻15号、愛知県教育振興会